国語学

西洋語と国語

重久篤太郎

國語科學講座

—Ⅲ—

國語學

西洋語と國語

重久篤太郎

株式會社

明治書院

國語科學講座

—Ⅳ—

國語學

西洋語と國語

重久篤太郎

株式會社
明治書院

目次

序　言……………………………………〈三〉

第一章　明治以前の西洋外來語……………………〈六〉

〔一〕南蠻希敎時代……………………………〈六〉

〔二〕和蘭貿易時代……………………………〈一四〉

第二章　明治以後の西洋外來語……………………〈二三〉

〔一〕幕末明初の西洋外來語……………………〈二三〉

〔二〕英語・米語……………………………〈二五〉

〔三〕佛蘭西語・獨乙語……………………………〈二七〉

〔四〕露西亞語・伊太利語……………………………〈三一〉

結　語……………………………………〈三三〉

西洋語と國語

重久篤太郎

序言

西洋語と國語と題した本稿の主眼とするところは、近代の西洋系統の外來語の史的概觀である。こゝでは外來語の學としての理論乃至方法論の問題には觸れない。

わが國の歸化語或ひは借用語とも稱せられる外來語は、語史的研究をおし進めれば、古い時代に文化的交渉が行はれた近接民族の言語であるアイヌ語・朝鮮語・支那語、及び朝鮮語と支那語を通じて入つた梵語などの輸入された時代にまで遡らねばならない。これらの諸近接語の中でも支那語の如きは漢語としてわが國語の語彙の大部分を占めるものであり、今日では我々が殆んど外來語であることを意識しない位に國語に歸化してしまつて、一々その原語を指摘することは至難である。年代が降つて我々の考察の範圍である西洋系統の外來語の時代になると、史學・文獻學の補助によつて原語の決定はさまで困難ではないけれども、最近の如く民族乃至國民との文化的接觸が複雜になつて來

ると、言語の關係も錯雜を極めて多種多様の外來語が國語中に交錯して用ひられるやうになつて來た。殊に近來の特色ある外來語の現象は、語彙の方面から見れば專門語が普通の語彙に侵入することであり、音韻變化から言へば洋語の轉訛が甚しく殊に發音の短縮化される傾向であり、又外來洋語の歸化や衰滅などの實にあはたゞしい流轉の狀態である。

抑も外來語とは、他國民或ひは他民族との接觸による文化的交流の結果として生ずる外國語の自國語への借用又は輸入を言ふ。それを自國語に混入して使用するものであるから、この意味に於いて外來語は借用語と呼ばれ、又は歸化語とも稱せられるのである。更に外來語の輸入の經路は他國民との直接の接觸によつて歸化される場合と直接に接しない他國語が自國語に混入される場合とである。具體的には、外來語の借用の路筋は文字とともに輸入される場合と、文字をはなれて口耳の間に傳つて借用される場合との二つの場合が考へ得られるが、多くの場合は文字に伴なつて傳つたものと考へてよい。

然らば一つの外來語が、どの時代にどの國語から借用されたかと云ふ問題に就いての探求は仲々簡單なものではなく、こゝに外來語の原語の決定の問題が生じて來るのであるが、これには比較言語學的方法論を要請する。他國語が外來語となるために注意すべき現象は、その原語そのまゝの音韻が行はれずに借用された國語に適應したところの音韻變化が行れることであるが、從つて外來語の原語決定のためには外來語の音聲轉訛法を考究すべきである。殊に近代の外來洋語になると、その輸入の經路を知りその年代を探求するためには特に歷史學乃至文獻學の補助が必要となつて來るのである。これらの補助によつてはじめて外來語の根本の原語を決定することが可能である。

更に外來要素と云ふ點から考へると、外國語が國語に及ぼした影響は、單語の借用のほかに直譯的文體や言ひ廻し方の借用もあり、又外國語の語法の國語の文章法への適用のことにも見出されるのである。これらの端緒は既に南蠻交通時代の國語中の外來要素に認められ、明治以降の外來洋語乃至外來要素の借用には、この傾向が著しく增進してゐることが知られる。

近代の西洋系統の外來語の發展史を概說するためには、考察の目安として、次の二時期に大別するのが便宜であらうと思ふ。第一期は第十六世紀の半頃から幕末に至るまでの明治以前の西洋外來語の時代であり、第二期は第十九世紀の中期頃の幕末明初から現代に至る明治以後の西洋外來語の時代である。

第一期の明治以前の西洋外來語は、更にこれを細分すると、(一)南蠻系統の外來語は、葡萄牙語を主體として若干の西班牙語・拉丁語があり、尙ほ西洋語を通じて入つた東洋語をも包含するものであるが、年代から言へば十六世紀の中頃から約百年間を指す。(二)和蘭貿易時代の外來語は、西洋語としては和蘭語があり、これに若干の東洋語が含まれるのである。時期は十七世紀の初頭から幕末に至る約二百五十年間にあたる。次に第二期の幕末明治以後の西洋外來語であるが、この期の初頭は蘭・英兩國語の謂はゞ過渡時代であり、一方に於いては開港場にピヂィン・イングリッシュなるものが發生した。この特殊な言語現象は我々の考察から見逃すことが出來ない。從つて明治二十年代頃から現代に至るまでの西洋系統の外來語史を概觀するためには、その國語別に區分して、(一)英米語、(二)佛蘭西語及び獨乙語、(三)露西亞語及び伊太利語に細別するのが便宜である。本稿ではほゞ西洋との通交貿易に基いた以上の歷史的區分に從つて考察をすゝめて行かうと思ふ。

第一章　明治以前の西洋外來語

〔一〕南蠻布教時代

こゝに南蠻布教時代の外來語と云ふのは、第十六世紀の半頃の足利末の天文年間の吉利支丹布教による葡萄牙人・西班牙人の渡來から、第十七世紀の中葉にあたる徳川初期の寛永年代の吉利支丹宗門禁制のため南蠻交通の途絶へたまでの凡そ一百年間に國語中に借用された西洋語を指して稱するのである。この期間に於いては來朝の宣教師は葡萄牙人か葡語に通曉せるものであつたので、渡來の西洋人が傳來した基督教の神學思想や新しい文物に伴なつて葡語の國語中に混入して用ひられるものが少なからず、從つて葡・西・拉の南蠻系統の外來語のうちでも最も勢力をもつたのは葡萄牙語であつた。拉丁語は日本人信徒の間に學習されたことがあつたけれども、西班牙語は葡語に比較して外來語としての生命は至つて短かく、その殘存するものは極めて少ない。ましてこの時期に日本との通商が僅かに十年間しか行はれなかつた英吉利の言語の當代への影響は殆どなかつたと云つてもよい。從つてこの時代の新來の宗教である吉利支丹の用語並びに貿易上の物産の名として用ひられた外來洋語は葡語が最も多く、次いで拉丁語・西班牙語の語彙が認められる。

A　吉利支丹用語　天主教の傳來と倶に輸入された西洋語は、傳道に方つて日本語に譯し難いために原語のまゝで用ひられたのであるが、土井忠生氏が「外來語研究」（第一卷第三輯）に寄せられた「日本耶蘇會の用語に就いて」に由れば、宣教師ガゴーの報告には日本語に飜譯しがたい宗教用語が葡語・拉丁語に五十語以上あると見えてゐる事が知ら

れる。實際には當時の信者の間に用ひられた外來語は更に多數であるが、例へばキリシタン、バテレン、エケレジヤなどと言ふ語は發音は國語の音韻に順應されたけれども、その原語のまゝで用ひられたのである。葡語と國語との關係は獨人ケンプェルにも注意されて、その著「日本の歴史」に若干の葡語が擧げられ、英吉利の吉利支丹版研究の先覺アーネスト・サトウの「日本耶蘇會刊行書志」には特に吉利丹文獻から宗教用語を列擧してこれに原語を與へたが、これらの外人の研究のほかに村上直次郎博士は明治三十六年の「史學雜誌」に「往時の西洋交通が國語に及ぼしたる影響」と題する有益なる外來洋語の語彙の集成を發表されたことがあり、前田太郎氏は「外來語の研究」中に、同氏の集めた宗教用語は二百五十四に上り、その大部分が葡語であることを指摘した。近くは村岡典嗣氏の「吉利支丹文學抄」附錄の「歐語抄」がある。まづはじめに葡語に屬するものを少しく錄して原語と譯語とを對照して見よう(以下語彙の採錄にはこの例に倣ふことゝする)。

アビト　habito　服、宣教師の常用せる法衣。

イルマン　irmão　伊留滿、法兄弟。

インヘルノ　inferno　地獄。

キリシタン　christão　吉利支丹、切支丹、天主教徒、基督教徒。

クルス　cruz　十字架。

コンチリサン　contrição　痛悔。

コンヘソル　confessor　(一)證人。(二)聽罪僧。

コレジオ　collegio　學林。

サカラメント　sacramento　祕蹟。

ゼンチヨ　gentio　異教徒、吉利支丹以外のものを云ふ。

バウチイズモ　baptismo(バウチシモ)の訛語、洗禮。

バテレン　padre(パデレ)の訛語、伴天連、神父、教

父。

ミサ　missa　彌撒、聖餐。

ハライゾ　paraiso　天國。

ユカリシチヤ　eucharistia　聖體、基督の聖體。

ペニテンシヤ　penitencia　悔悟。

ルシヘル　lucifer　惡魔。

マルチリ　martyrio　致命、殉教。

ロザリヨ　rosario　玫瑰花冠、聖母マリヤに對する十五ケ條の祈禱、及びそれに用ふる念珠。

マサン　maçan　麻三、林檎。

以上のうち拉丁語より出でたる語にて既に葡語に入つたものには葡語として擧げたものもあるが、拉丁語から出た借用語は至つて少ないが、次にその原語を拉丁語に求め得られると信ぜられるものを擧げる。

アニマ　anima　靈魂。

ゴパツシヨ　御 passio　苦難、基督の受難。

アベマリヤ　Ave Maria　聖母マリヤ。

デウス　Deus　神。

エケレシヤ　ecclesia　敎會、敎會堂。

ヒイデス　fiedes　信仰。

オラシヨ　oratio　祈禱。

西班牙語は、その言語主である西班牙人の宗敎上並びに貿易上に於ける活躍が葡萄牙人ほどではなく、殊に西班牙人の來航は葡萄牙人に四十年餘遲れてゐたので、その言語の國語中に混入して用ひられるものは尠少である。當時の宗敎用語には原語を葡語に求むべきや或ひは西班牙語に求むべきやその本源を究めることの困難な語もあるが、本來西班牙語として考へられる宗敎用語としては僅かに、コミサリヨ (Comisario 管區長代理)、コンヘシヨン(confesion 告解・懺悔)などを摘出することができるのみである。從つて吉利支丹用語のあるものは、原語多元說を採つて葡西

兩語を原語と考へてよいのである。

これらの吉利支丹用語は、德川幕府の禁敎政策の爲に殆んど衰滅して、今日行はれる言葉は至つて僅かしかない。地方的には長崎方面の潜伏吉利支丹の間に殘存してゐるものも少し許りはある。例へば同地方に「おてんぺんしや」或ひは「お天邊者」と云つて舊吉利支丹の徒が家きよめ、病魔拂に打振るものがあるが、これは葡語のペニテンシヤ（pe-nitencia 悔悟）の轉訛であり、バウチイズモ（洗禮）は「バオツル島」となり、マサン（林檎）の語もその口傳に殘つてゐる。

この吉利支丹布敎時代の外來語に就いて注意すべきは、寫音法に新工夫が加へられて從來の國語には擬聲音以外にP音ではじまる語はなかつたのが、P音を寫すためには、ハ行の右肩に半濁音符を添へてその音を示すことが考案されて、パン（pão 麵麭）とかパツパ（Papa 羅馬法王）などの語が傳へられた。また連續子音の間には次に來る母音と同一母音を挿入する傾向があらはれ、graça はガラサとなり、christão はきりしたんと寫されるが如き現象が認められる。宗敎書の譯文の文體に於いては直譯的な外國の文脈が輸入せられ、或ひは伴天連ワリニヤーニの天正十一年（一五八三）の書翰には彼によつて、日本語の讀み書きのためにローマ字綴論が考へられたことが見えてゐることも附記しておきたい。

B 南蠻貿易關係用語 以上に述べた精神文化に關する外來語に次いで擧げなければならないのは、南蠻人の渡來と倶に傳來した貿易上の物産名の洋語である。これらは主として葡語から取り入れた語であつて、その由來する所が遠く而も漢字をあてゝ用ひられるので現在では全く西洋語と云ふ感じがなくなるほどに歸化してゐる。長崎の古賀十

二郎氏の調査によると、同氏が集められた所の葡語は宗教語も含めて約四千語ほどあり、德川時代の中期の和蘭語が勢力を得た時代になつても約二千語はあり、今日の長崎の人の使用してゐる葡語より入つた外來語は五十位はあると云ふことである。長崎は元龜元年(一五七〇)から七十年間の葡萄牙人の在住によつてこれだけの國語上の影響を受けたのであるが、この趨勢は南蠻との交通時代に於ける葡語の消長を語る一資料である。

まづ葡語を原語とする外來語彙から飲食關係の語を拾つてみるならば、左のやうなものがある。

パンは今日でも遺存してゐる長命の外來語であるが、葡語の pão より出た語である。このパンの語を大槻磐水は寛政十一年(一七九九)刊の「蘭說辨惑」にて「和蘭隣國拂郎察といふ國にて「ぱいん」いふよし此語の轉ぜるか」と考へたけれども、これは誤りである。慶長年間には江戶・長崎にてパン製造のことがあり、古くは吉利支丹文獻に現はれ、「大日本史料」第十二編之六に錄せた慶長十四年(一六〇九)九月上總に漂着せる西班牙船乘組の前ルソン長官ドン・ロドリゴの報告書譯文にもパンの語が見えてゐる如く、パンは古く南蠻布教時代の外來語である。

それから料理に關した語には、ヒリヨウスがあり、飛龍頭と書かれてゐるが、葡語の filhoses から出たものと考へられてゐる。長崎にてヒカドと稱する南蠻料理があるが、この語も葡語 picado の借用である。古賀十二郎氏の說では天麩羅と云ふ語も、葡語の tempero と云ふ調理を意味する語から出たものであると言はれてゐるが、南蠻系統の言葉らしく思はれるものである。ワカ或ひはワアカと云ふのは葡萄牙語であつて vaca 又は vacca にあたり牛肉のことである。なほ長崎では料理人をクスネリと呼び、この語は鎖國時代になつても行はれて出島蘭館の料理人を稱したのであるが、やはり葡語を原語とするもので cozinheiro にあたる。しかしクスネリの語は後に蘭語のコックが

行はれるに及んでは滅びてしまつた。今日料理人をコックと言ふのはこの蘭語の名殘である。

漬物の一種でアチャラ漬と云ふ語は、新村出博士の考證によれば、葡語 achar に出づるが、慶長元和時代の日本の英商館に居たリチャード・コックスと云ふ商人頭の日記にアチャラの語が見え、語原は波斯語であつて馬來語にも入つてをるが、日本には南蠻貿易時代に葡語を通じて入つたものと考へられる。

南蠻交通時代には、葡萄牙人のほかにシャム人や東京人や黒坊等の東洋人の渡來するものもあつたので、當代の外國語としては葡萄牙語が最も多く用ひられたのであるけれども、シャム語・東京語・馬來語などの東洋語が多少用ひられた。當時馬來語は渡來の黑坊の間に用ひられたのであつた。かくして、南蠻貿易時代から東洋語が國語に入つたが、その傳來の經路を考へると主として葡萄牙語を通じて借用されたものである。しかしこの頃に直接に東洋語が日本語に取り入れられたと考へられるものも若干はある。

例へば煙管はアーネスト・サトウの「煙草傳來考」で指摘されたやうに、管の意のカムボチヤ語 khsier から入つたものであり、この語は古く慶長寛永年代の林羅山の「羅山文集」に見え、元祿三年(一六九〇)刊の「人倫訓蒙圖彙」にも出てゐる。蒟醬・蒟醬手・キンマ手香盒などのキンマの語原は不明とされて、南蠻語ならんと考へられてゐたが、これは暹羅語から入つた語と思はれる。「恩賜京都博物館講演集第九集」の三木榮氏の「日本と關係ある古藝術に就て」によれば、暹羅語で檳榔子の實をマークと云ひ、嚙むことをキンと言ふが、キンマはこの暹羅語キンマークの轉訛であると說かれてゐる。

織物の名には東洋語が葡語を通じて入つたものが多いが、まづその方面の語から言へば次の如きものがある。カア

サ木綿のカアサは葡語 casa にあたるが、元來は印度語であらう。カナキンは金巾と書かれてゐるが、もと印度語より出でて葡語に入つたのであつて日本語へは葡語 canequim から入つたものである。綿布の一種であるギガン島(縞)は元來は馬來語 ging-gang に出でて葡語 guingão を原語とするものであり、更紗は葡語 saraça にあつべきであるが、元來サラサの語は古代爪哇語より出でて葡語に入つたのである。尙ほ南蠻貿易時代の織物と考へられるものに羅紗・天鵞絨・棧留・繻珍などがあり、いづれも出自は葡語である。各〻葡語の raxa, veludo, São Thomé, setim をあつべきものである。又襦袢は葡語 gibão である。メリヤスは長崎でメイヤスとも稱されるが、西班牙語の medias から出た語で、元來は「半分又は中位」を意味する media に複數の s をつけて medias となり、日本では肌につけるメリヤスと言ふ意味に變化したのであると考へられる。そのほか葡語から出た服裝語彙には合羽(capa)、輕衫(calção ズボン下の意)、ボタン(botão)の語もある。

菓子の名では、カステラをまづ第一に擧げねばならない。カステラは長崎の名産として名高いが、葡語 Castella より出で、詳しくは pão de Castella の略語と考ふべきである。金平糖も元來は長崎の名物であつたが、葡語 confeito にあたり、有平糖のアルヘイは葡語 alfeloa の轉訛であり、今日熊本の名産になつてゐるカセイタは加勢多と書かれて南蠻系統の洋語と思はれるが原語は明らかではない。カルメラは浮石糖の文字が書かれてゐるが、葡語 caramelo 又は西班牙語 caramelo の轉訛である。これは今日の英語から入つたキヤラメルと物は異なるが、同じ語源である。

南蠻酒では、チンタ酒が名高く、往時は珍陀酒と書かれて珍重された赤色葡萄酒である。葡語のヴイニヨ・チント

vinho tinto の上略であり、ヴィニョは葡萄酒、チントは有色の意であるが、この場合形容詞のチントは外來語では品詞が變つて名詞として用ひられたのである。

植物の名稱では葡語から出たものには、アメンドウ(amendoa)、胡荽の文字のあてられたコヱントロ(coentro)、海椰子のコキンニョ(coquilho)、パンヤ(panha, paina)、マルメロ(marmelo)などがある。パンヤは元來印度語であり、木綿樹及びそれからとれる綿を云ふのである。また、藥品のヘイサラ・バサラ(pedra bozoar)のヘイサラは、pedra の轉語で葡語では石の意、バサラの bozoar (獸)はもと東印度語より出でゝ葡語に歸化した語である。

次に西班牙語から出たと考へられる植物名にはアナナス(ananas 凰梨)、イノンド(eneldo 蒔蘿)、ザボン(zamboa 朱欒)がある。アナナスは今日で云ふパイナツプルのことで、イノンドは從來語原は不明とされたが、藥草で原語は西班牙語である。

その他の南蠻貿易に伴つて輸入された外來語に、骨牌(carta)の如き娯樂品、ハアカ(faca小刀)、フラスコ(frasco)・ビイドロ(vidro)の如き什器、或ひは煙草(tabaco)、ボウブラ(abobora)などがある。住宅に關した語ではトタンがあり、これは tutanaga から出た語で波斯語に遡り得るものであるが、慶長八年(一六〇三)刊の吉利支丹版の日葡辭典に出てゐるのが出典中最も古い。それから船の型を云ふものにガリアン(galeão)、ガレウタ(galeota)があり、俱に正保四年(一六四七)の肥前大村家覺書に出て來る。以上の各語はいづれも葡語から出た外來語である。

天文學に關するものでは、アストロラビヨ(astrolabio)と云ふ測晷器や、クルセイロ(cruzeiro)と言ふ南十字星座を指す葡語があり、元和四年(一六一八)序の「元和航海記」に錄せられてをる。

本節を終るに方つて一言しておきたいのは南蠻系統の洋語の外來語としての運命である。寛永年代の鎖國時代になると南蠻人の渡來が杜絶したので、それから後は葡語をはじめ南蠻語は漸次衰滅してしまつた。鎖國時代になつても舊外來語である葡語などは多少殘存した痕跡がうかがはれるが、宗教用語の南蠻語は後世まで生存した二三の語を除いては殆んど絶滅したのであつて、僅かに貿易に關するもののみが和蘭語時代に行はれてゐたのである。例へば酒盃のフラスコ、硝子のビイドロの如き葡語からの舊外來語は、蘭語のコツプ(kop)、ガラス(glas)と對立して用ひられたことがあり、葡語の石鹸であるシヤボン(sabão)は蘭語のセップ(zeep)に代られることなく生存し、短艇を意味する葡語のバッテラ(bateira)の如きは英語のボートに代へられるまでの明治二十年代頃までも行はれたのである。學術用語では葡語のランビキ(alambique)が用ひられ、明治初年まで殘存した。しかし今日になると南蠻系統の洋語の多くは廢語となり、宗教用語などは吉利支丹を取り入れた文學作品の中に再び生かして用ひられるほか、我々の口に上るものはキリシタン、バテレン位である。そのほか殘存してゐるものではパンの語が最も永く生存を續けてをり、植物の名にラセイタ草と云ふのがある。このラセイタは元來は毛織物の名であつた葡語の raxeta から出て、全く物の異なつた植物の名に殘つたのである。又「ピンからきりまで」と言ふ文句のピンは、南蠻骨牌の用語で一の數を指す語であるが、原語は西班牙語のプンタ(punta點)又は葡語のピンタ(pinta)と考へられるが、英語のポイントと同源である。今日も尚ほ殘存して日常に用ひられる西班牙語としては、僅かにメリヤスの語があるのみで、南蠻系統の西洋語でも西班牙語はその生存力が至つて弱い。

〔二〕 和蘭貿易時代

和蘭貿易時代とは、慶長十四年(一六〇九)に和蘭人が平戸に商館を開いた第十七世紀の初頭から安政開國前後の第十九世紀の中葉までの時期を指して言ふのである。しかし最も和蘭貿易が隆盛を極めたのは寛永十六年(一六三九)の鎖國以後、すなはち同十八年に和蘭商館が平戸から長崎に移された以後のことであつて、爾來幕末の開國に至るまでの間は和蘭が支那を除いては海外との唯一の通商國として貿易上の特權を獨占して多大の利益を收めたのである。

これを外來語史の側から考へると、鎖國後に於いても長崎の外國語の譯官たる通詞の間に南蠻語の研究が續けられたのであるけれども、南蠻人の渡來が杜絶してからは葡語の勢が衰滅して、これに代つて興つたところの新外來語たる和蘭語が日常語中に根をはるに至つた。殊に享保五年(一七二〇)に吉宗が吉利支丹關係以外の洋書の輸入の禁を解いてからは、蘭學が興隆を極めて、天文學・醫學・本草學・化學などの主として自然科學方面の西洋の學問はすべて和蘭を經由してわが國に傳來したのである。從つて和蘭語はこの時運に乘じて多大の勢力をもち、國語中には學術上並びに貿易上の和蘭語が次第に多く取り入れられて、新外來語として和蘭語の全盛の時代となつた。地理的に言つても和蘭語は長崎を中心に江戸・京阪地方で研究されて、外來語としても學術上のみならず日常の事物の名にまで侵入した。かくして蘭語の勢力は德川時代の末期に及んだのであるが、安政開國以後になると新來國の言語である英吉利語や米語のために次第に驅逐されて來て、僅かに蘭英語の過渡時代である明治初年にその名殘を存するに至つた。

つぎに紅毛系統の西洋語である蘭語及び蘭語を通じて入つた東洋語は、內容上から區分すると、(一)蘭學時代の學術語、(二)和蘭貿易關係用語に分つことが出來るであらう。

A 蘭學時代の學術語　わが國に於ける自然科學の發展は、先に述べた南蠻布敎時代に端を發するものである。即

ち當代の日本人は吉利支丹宣教師から西洋の科學として天文學と醫學とを學んだのであるが、天文學は林羅山が歸化人澤野忠庵の記述せる天文書の本文に辯說を附したかの「乾坤辯說」に凝集せられ、醫學は南蠻流外科が後代に傳へられた。鎖國期に入つてからは、蘭學の勃興によつて歐洲近世の自然科學の成果が傳へられて、蘭學時代になるとまづ西洋の天文學が傳來され、ついで物理・化學・植物學などが攝取されて、德川末期になると歐洲の應用工業が取り入れられるに至つた。これらの西洋流の學問は江戸と長崎を中心にして發展したのである。

學術上の外來語として借用された蘭語で、まづ天文暦術の語を次に擧げる。

ウエールガラス　weerglas　晴雨計。　　ゾンネウエーセル　zonnewijzer　日時計。
オクタント　octant　八圓儀。八分儀。　　タルモメートル　thermometer　寒暖計。
コンパス　kompas　渾發。兩脚器。　　テレスコップ　telescoop　遠目鏡。望遠鏡。
ゾンガラス　zonglas　太陽觀測器。

醫學關係の語ではスポイト(spuit)、メス(mes)、レトルト(retort)があるが、スポイトは藥液を注入して洗滌する器であり、メスは外科用の小刀の意に用ひられ、當時食卓用のナイフには葡語のハアカ(faca)があつてメスの語と區別され、レトルトは蒸溜器であり、いづれも今日もなほ生存する語である。廢語にはなつたが外科に用ひる針をランセタ(lancet)と稱した。化學のことを蘭語の chemie から音譯して舍密と云ふ文字をあてられたことは宇田川榕庵の天保八年の「舍密開宗」からはじまるのであらうが、明治初年まで用ひられて明治元年に大阪には「大阪舍密局」と云ふ工業試驗所が設けられたことがあり、明初の京都府記錄にも舍密の文字が見えてゐるけれども、その後は化學なる譯

語が用ひられたのである。最近セイミの語を活して「舎密」と言ふ題名の雜誌が兵庫縣の蘆屋で刊行されてゐるのも面白い。京都では今なほ蘭語のアポテキ(apotheker)と書かれた看板のあがつた藥屋を見出すことが出來る。

そのほか和蘭藥局方時代に入つた藥品名には次のやうなものがある。アブシント草は苦艾であるが、蘭語のabsintから來た語で、今日用ひる佛蘭西語のアブサンにあたるものである。元アラビヤ語から出たアルコール(alkhol)或ひはエキス(extract の下略)、チンキ(tinctur の略言)、ヘット(vet 豚脂)なども蘭語の名殘である。

植物の名では、アンジヤベルは紅毛石竹であり、市河三喜博士の見られた寫本にはアンゼリイルと書かれてゐると言ふことであるが、この語は和蘭語の angelier, anjelier の轉訛とみるべきであらう。文政年間に高野長英が著はした「二物考」に出てゐるアツプラは、東北地方の方言にも見える語でヂヤガタラ芋のことであるが、蘭語の aardapple の略言を訛つたものである。文政年間にはじめて渡來したオリーブ樹は、橄欖にあてられ英語のオリーブから出た語と考へられるけれども、蘭語 olijf が原語であり、英語のオリーブは色をさして言ふ。エニシダは拉丁語の genista を和蘭語流に發音したものであるが、その出自は蘭語と考へるべきであらう。

その次に擧げたいのは同じく植物名であるが、カミツレ(kamille)は藥用植物である。サフランの原語は蘭語 saffraanであるが、もとはアラビア語より出たものであり、ヘンルーダは漢字で芸香と書いて、下劑に用ひられるが、その出自は蘭語のウエンルート(wijnruit)から出たものである。ウエンルートからヘンルーダになつた轉訛の甚しいものであるが、市河博士はこの音韻變化は假名による發音からきたものであり、恐らくヴエン＞ベン＞ヘンと變つたものであらうと考察せられた。この假名書きによる音韻變化は、外來語研究上に注意すべき現象である。

植物學乃至本草に關する語を擧げたので、次に動物學に關係ある蘭語から出た語彙を錄せば、カラクン島、クウクウや鳳五郎などがある。カラクンは蘭語 kalkoen にあつべき語で食火鳥を指してをり、クウクウは蘭語 koekoek より出て「俚言集覽」に子規の阿蘭陀名と見えてゐる。鳳五郎と全く日本語に歸化してしまつた駝鳥のホーゴローは、蘭語のストロイス・ホーゲル (struisvogel) の略言の轉訛である。

和蘭語學に關した語では、ウオールデンブックは辭書の意の woordenboek から出で、ガラマテカは文法の義の grammatica からの借用語であり、ガラマテカは英語のグラマーと同語源である。

德川末期になつて漸く歐洲重工業の發達の後を追ふたのであるが、この頃の應用工業上の蘭語で國語に取り入れられたものには、グライバンと云ふ語がある。これは鐵工の用ひる旋盤のことであり、蘭語の draaibank の轉訛である。造船用語にドックがあるが、これは普通に英語のドック(dock)と考へられるが、幕末に蘭語の dok から入つたのであり、申すまでもなく船渠・造船所の意に用ひられる。寛政年間に幕府が和蘭より購入した泳氣鐘のイクルスコロックがある。潛水器の一種と思はれるが、この語は、蘭語のドイクルコロック (duikerklok) の轉訛らしく考へられる。

蘭語から入つた西洋學術語で見逃すことのできないものに、エレキテル又はエレキがある。電氣の義の蘭語 electriciteit から來た語である。今日ではエレキは古語となつたが、エレキテルは古くはエレキテリセイリテイと書かれて、後藤梨春の明和二年(一七六五)の「紅毛談」下卷に出てくる。これがわが國に於ける電氣に關する記事の初見であるが、エレキテルを平賀源内が自ら製作したことがあつて、その製作年代は最近の調査に由ると安永五年(一七七六)

十一月と云ふことである。エレキテルは天明七年(一七八七)刊の森島中良の「紅毛雜話」や翌年の大槻磐水の「蘭說辨惑」にも出てゐる。

B　**和蘭貿易關係用語**　葡萄牙人の南蠻貿易に次いで行はれた和蘭貿易が通商上に獨占的な利益を得るやうになつたのは、平戶の蘭商館が寬永十八年(一六四一)に長崎の出島に移されて以來のことであり、それより幕末開港の時に至るまで二百十年間和蘭の日本貿易は長崎の地で營まれた。從つて和蘭から或ひは和蘭人を通じて歐洲及び東亞・南洋などから舶載される文物はすべて長崎を通じてであつた。されば長崎に及ぼした舶載の文物に伴つて入つた蘭語の影響は大きく、多少その名殘も亦永く存してゐる譯である。古賀十二郞氏の編された「長崎市史、風俗編」の附錄「長崎方言集覽」には、和蘭貿易時代に入つた多くの語彙を收錄してある。又日本語中の和蘭語に就いては、コイペル氏の硏究に上つたことがあつた。

まづ和蘭料理に關する外來語から述べよう。長崎でターフルとは和蘭料理を意味するもので元來は食卓と云ふ意味の蘭語 tafel から出たので、長崎では西洋料理の意に用ひられるのである。

ボートル　蘭語 boter、牛酪である。今日ではこの語は滅んで英語のバターが代つたが、明治初期までその名殘が存して、英語バターがボートルと發音されたこともあつた。

アラキ　蘭語の arak から入つて、漢字で阿刺吉・荒氣と書かれ、母語はアラビヤ語であるが、一種の蒸餾酒である。和蘭貿易時代には蘭領爪哇產のものが舶載された。

アネイスウエイン　蘭語 anijswijn で、大茴香酒である。

ゼネーフル　蘭語では genever と言ふ。英語のヂンにあたる酒である。

ビール　通常英語から入つたやうに考へられるけれども、出自は蘭語 bier である。

コーヒー　關西ではコーヒと云ふが、これも英語よりも早く、蘭語の koffij を訛稱したのである。

メルキ　牛乳にあたる蘭語 melk から出たが、今日では廢語となつて英語のミルクに代はられた。

次に菓子の名であるが、ヲベリー (oblie)、カネールクウク(kaneelkoekje)、ボーフルチス(poffertjes)などがあつたが、いづれも和蘭風の菓子である。

食卓用語の食匙を指すレイペル (lepel) は現在で廢語となつたが、ホルコ又はホコは尙ほ生存してゐて蘭語 vork から出たもので、英語のフォークと同一語源である。

服飾品の多くは、南蠻系統の洋語の場合にみられた如くに、その原產地や積出港の言語から由來するものであるので、東亞語や南洋語が大抵は蘭語を通じて入つたものがかなりある。例には主なもののみを擧げることにする。

インデン　蘭語 Indien (印度)から轉じて印度產の革を稱した。

キガン島　歸雁島と書かれたが、キガンは蘭語 gingam に出で、現在で縞と書くのを古くは島と書いた。キガンは元來は馬來語から出た語である。

ゴロフクリン　蘭語 grofgrein の訛語であるが、古くは慶長末年の文獻に現はれ、寬永頃からゴロと略稱され、又幕末にはフクリンと略稱された。これは語の合成要素の切りちがへである。

ヅック　蘭語 doek より入つた語で、麻の厚織である。

ロマル島　元來は波斯語ロマル(romal)或ひは印度語ルマル(rumal)から出た語であり、日本語へは蘭語を通じて入つたものであらう。織物の一種であつて、ハルシヤ(波斯)國より舶載と言ふことが、延寶頃の記錄「長崎聞書」に出てゐると言ふ。

その他の舶載品にはガラス(glas)、ギヤマン(diamante)、コツプ(kop)、コロツプ(prop)などの什器がある。ギヤマンは原語では金剛石を意味するが、わが國では切子硝子の意に誤用した。

住宅に關するものには、カンテラ(kandelaar)、ブリキ(blik)、ペンキ(pek)、ポンプ(pomp)があり、樂器にはオールゴール(orgel 自鳴琴)、ラツパ(roeper)などが傳來した。

船員・船乘を呼んでマドロスと言ふのも、蘭語 matros から出た語で、今日もなほ生存してゐて開港場に用ひられ且つ普通語にも侵入してゐる。又マアカン、マアカン部屋と云ふ語が長崎方言のうちに潜んでゐるが、マアカンとはもと馬來語 makan と言ふ食事の意から出て、德川時代には蘭商館の料理人を云ひ、今日でも蘭語のコツク(kok)と並び用ひられてゐる。マアカン部屋は德川時代には蘭館の料理部屋を稱したのであるが、現在の長崎では弘く西洋料理を調理する部屋を言ふのである。

次に和蘭語の勢力消長の跡を考へなければならないのであるが、幕末開國以後になると、既に述べたやうに學術用語として又貿易關係の用語として盛んに外來した蘭語は、新來の英米語等の西洋語のため、次第に影を潜めるに至つた。而して僅かに明治初年の蘭英過渡期に和蘭語の名殘がとゞめられたけれども、今なほ日常用語に生存を續けたものは、割合から言へば德川中期以來殘存した葡語に比して少ない。また明治初年の蘭英過渡期とでも言ふ時代の和蘭

語の名殘のことは、考察上の便宜上から第二章に於いて述べたいと思ふ。尙ほこの蘭英過渡期の外來語に就いては、新村博士が「外來語研究」誌上に發表された有益な諸論文のあることを特記しておきたい。

第二章　明治以後の西洋外來語

〔一〕 幕末明初の西洋外來語

明治以後になると、蘭語が殆んど廢滅してしまつて、僅かに幕末明初の謂はゞ蘭英過渡期にあつてその殘存の痕跡をとゞめるに過ぎなくなり、蘭語に代つて興つた新外來語としては英米語をはじめ佛蘭西語・獨乙語・露西亞語・伊太利語が國語中に侵入したのである。殊に舊外來語である蘭語の名殘りは明初に存し、且つ英語の發音に和蘭語流の發音の影響が及んだことは更に明治二十年前後まで年代が下りうると思はれる。

蘭語より英語への過渡時代には、德川時代に入つた蘭語のあるものは、英語と同一語源と同形類音であるために、その出自が忘れられて英語と誤解されるに至つた。この事は獨英兩語の場合にも言ひ得られるのである。この時代には英語が次第に勢力を張るやうになつたのであるがなほ和蘭語の名殘や蘭語流の發音の餘波を認めることができる。

ガス・ガラス・コツプ・コロップなどの語は英語から傳來したものではなく、それ以前の文獻にあらはれてゐるやうに、既に和蘭語から入つたものである。右のうちガラスは蘭語の glas から出たものであるが、このガラスの發音は連續子音の間には次に來る母音と同一の母音を附加する轉音の例である。この外來語の轉音のことは、前述の如くに、吉利支丹布教時代の南蠻語にも認められる所の傾向である。ガラスの語は德川中期に擡頭し、寶曆年間の平賀源

内の「物類品隲」に出典を求め得られる。コロップは英語の cork よりと考へられるのは誤りで、蘭語の prop の轉訛である。それからサーベル・フラフ・ラッパ・ランドセルなどと言ふ軍事に關した語の出自は蘭語である。フラフ(vlag)は旗を言ひ明初まで殘存したが、今は長崎方言に潜んでゐる。

明治初年頃まで行はれたカーヘルは、蘭語 kachel から出て明治五年頃の文獻に見えるが、後には英語のストーブが行はれるやうになつた。貨幣や量目のポンドも英語のパウンドよりではなく蘭語 Pond から來たものである。又英語のフランネルに先立つて蘭語のフランネル(flanel)の語が行はれ、明初の英和辭典にも出てゐる。長崎及び横濱方言で酩酊の事をドロンケンと言ふが、これは英語のドランカードの訛語と考へられるけれども、出自は蘭語の dronken と考へたい。

次に蘭英過渡時代の外來語に就いて注意を要することは、英語時代になつても蘭語流の發音で英語を發音したことである。例へば英語のバター(butter)をボートルと發音したり、英語のリーダー(reader)をリードルと讀み、貨幣のダラー(dollar)をドルラルと發音したのは、語尾の er や r をはつきりと響かせた蘭語流の發音の名殘である。明治九年の「東京開成學校一覽」に英語のセメント(cement)をシメントと記されてあるが、これは蘭語流の發音の餘波と見られる。

安政開國頃から明治初年にかけて、横濱を中心に開港場に發生したピヂン・イングリッシュ(Pidgin-English)は、英語を話す外國人と日本人との間の思想傳達の手段として行はれた變則な英語であり、はじめは西洋人とその婢僕や出入のものとの間の通用語であつたのが、遂には商取引や横濱の一般の人々にも使はれるやうに使用の範圍が擴

げられた。

所謂橫濱英語と稱せられる破格な英語は、日本語を混淆して或ひは若干の東亞語も交へて話されたのであるが、外國人の口から日本人の耳へ傳つたものであるから、巧みに原語の聲音抑揚を摸倣して原語の趣きを傳へてゐる。又一方では次第に邦語の發音に順應されて音韻上の轉訛も少くない。この音韻轉訛の例として面白いのは、洋犬をカメ或ひはカメヤと言つたことである。在住の英米人が犬を呼んで "Come ! Come!" 又は "Come here !" と言つたのを聞き誤つて洋犬の意に解されるに至つたのである。地方の方言に存するドンタクは蘭語のゾンタク (zondag) からの轉音であるが、原義の日曜日が轉じて休日の意に用ひられ、又土曜日のことを半ドンと言つた。

この言語の語法は至つて簡單であり、語の表現方法も聯想から來たものが多い。最近逝去された京大のクラーク敎授が「アリマス・アリマセン・ラングエーヂ」と稱された如くに、Arimas と言ふ語一つで To have, Will have, Has had, Can have, To obtain, To be, To wish to be, To be at home, To arrive, To want の意に使ひ分けられるのである。

Funey high kin serampan nigh rosokoo は燈臺の意であり、Consul-bobbery-sto は辯護士の義であり、Dora donnyson は銀行家を意味するのである。又 Sick man by and by all right home は病院の意味である。このセランパンはサランパン、サランパとも稱され破壞の意に用ひられるが、馬來語のバタヴィヤ方言 sarampang あたりから來たのではないかと考へられる。ボバリーは東印度諸島や支那に用ひられる語で凡ゆる種類の騷ぎ、紛爭をば意味するが、ヂヤイルスは廣東語の吧蔽をあてたけれども、本源は印度語の Bip re (O father!) から出たものらし

い。

その他に地方の方言に殘存したペケは piggy と書かれて駄目、いけないの意に用ひられるが、これは馬來語の「行く、去る」の意の pergi, pârgi から來たものである。これらの東亞語及び南洋語は南海に往來した外國船員によつて傳來されたものと考へたい。

しかし、これらの破格な英語も明治中期から漸次に勢が衰へて、現在では若干の語彙が方言中に殘存するのみで殆ど絶滅してしまつた。僅かにその傳統は波止場の車屋英語として人力車夫の間に繼承されるに過ぎない。

〔二〕 英 語・米 語

徳川時代に根を張つた和蘭語の衰滅の跡をうけて興つた英語が、國語中に侵入したのは幕末開國以來のことと考へられるが、明初の蘭英過渡時代を經て、明治二十年代からは西洋外來語中でも英語が最もその駿足を伸す氣運に向つたのである。英語教育の普及と新らしい文物の傳來に伴なひ、殊に最近ではスポーツ・映畫の方面からも英語が國語に取り入れられて、英語は恰も第二の國語の如き感を呈するに至つた。所謂モダン語と稱する流行語の大部分は英語であり、西洋外來語の九十五パーセントは英語から入つたのである。荒川惣兵衞氏の「日本語となつた英語」には、極めて積極的に約五千語を集められてゐるが、市河博士の數年前の調査では國語に攝取された英語は千四百語あつたことが知られる。現在ならば遙かに多くの語彙を期待することができよう。

國語中の英語の各語に就いてその輸入の經路や年代を具體的に實証することは至難であるが、文献的調査をすゝめればその傳來の時期をうかがひ得るであらう。ステッキ・ナイフ・ハンケチ・バンク・ランプ・ブランケット・ワニ

スなどの語は既に明初の文獻に現はれてをり、このうちブランケツトは明治中期まではその上略言のケツトと併用されたが、ワニス（varnish）は後にニスと省略した語が行はれたのである。以上は明治二十年頃までの文獻に現はれてゐる。

大正期にはスポーツ關係の語や社會思想の英語が傳來して外來單語は稍々複雜となり、その末年にはモダン語の端緒が認められる。

更に米語を發音と用語の相異から英語と區別して考察すると、アメリカから入つた語には左に擧げるやうなものがある。古くはメリケンの語があり、メリケン粉・メリケン波止場などと用ひられた。商業用語に、カタン絲のカタン(cotten)、カラー、デパートメント・ストアの下略言のデパートがある。衣食住關係の語にはアイスクリーム、カクテル、罐詰のカン(can)などの食料品名があり、アパートメント・ハウスを短縮したアパートやエレベーターなどの住居關係の語がある。スポーツ用語ではサツカー、バレー・ボールがあり、その他スケヂユール、ナンセンスなどの語もアメリカから入つたのである。最近では品物は逆輸入であるがハツピー・コートの語が傳來した。

英語が日常の國語に弘く取り入れられた結果として、その儘では英語には通じない和製英語が大いに作られるやうになつた。例へばオールド・ミス、ステッキ・ガール、ハイカラとか、これは更に蠻カラの語を生んだが、ラスト・ヘビーとかワイシヤツ(white-shirt)などがある。外國語が國語中に攝取される場合には、多くは原語の發音が國語化して行はれるのであるけれども、最近の英語は原語の發音に近づいて行く傾向がある。グランドと發音したのがグラウンドになり、サービスと書かれたのがサーヴイスとなる如きである。更に外來語としての英語は、省略・短縮を行

つて單音化されて發音される傾向がある。卽ちブルジョアを略してブルと言ひ、ビルディングを略してビルと稱し、マーケットをマートと呼ぶなどはこの適例である。これは端的に表現する能率的見地から行はれる現象であると考へられる。

次に英語の國語への影響のことであるが、それは單に語彙の上ばかりでなく、言ひ廻し方や表現方法にも及んでゐることに注意せねばならぬ。受身の動詞が多く用ひられるに至つたことや、人以外の事物を主格に用ひるのは英語風である。その例は「……せられる」とか「何が彼女をさうさせたか」など言ふ表現法である。かういふ西洋語の外來要素として國語の語法への侵入は、たゞに英語からのみではないけれども、最も國語の語法への侵入の大なるものは英語からである。

又飜譯した外來要素としては、「蜜月」(honeymoon)や「社會奉仕」(social service)の如き語や「象牙の塔」(tower of ivory)のやうな成句や、沙翁の「ハムレット」に出て來る「弱き者よ、汝の名は女なり」(Frailty, thy name is woman)の如き諺は、明らかに英語からその儘借用されたものである。

かくの如く、明治以來英語は國語の語彙に、その文章法の上に多大の影響を與へた。すなはち英語は直接には外來語として國語の語彙を豐富にし、且つ間接には外來要素として國語の語法に侵入して國語に新鮮味を加へ更に國語の表現法を增殖したのである。

〔三〕 佛蘭西語・獨乙語

明治以後の外來語の運命として、西洋外來語中の九十五パーセントをしめる英語を除くと、國語に入つた歐洲語は

甚だ少ないのである。由來英語は他國語を取入れることが至つて寛大であつたため、國語に入つた本來の佛・伊兩語の多くは直接に輸入されたのではなく、英語を經由したものであり、その出自は簡單に決し難いものであり、こゝに原語多元說が起りうるのである。又新西洋語の語法が國語の領域へ侵入のことも、英語の場合における如くには、その實例を具體的にあげることは困難である。從つてかうした新外來語の勢として、英米語を除いた西洋語に就いての記述は自然と簡略とならざるを得ないのである。

わが國に於ける佛蘭西語研究は、フランス革命の刺激によつて第十九世紀初頭の文政年間にはじまり、明治初年に及んだのであるが、その後の勢は衰微した。古くは幕末の文献に佛語が散見してゐるけれども、外來語として國語に混入したのは明治以後のことであり、又佛語は日本へは直輸入と云ふよりも英語を通じて入つたものが多い。內容上からみれば、主として藝術・服飾・料理の名稱が取り入れられてをり、近年になると若干の社會思想に關する語が入つて來た。

明治時代に旣に外來語として認められる佛語には、シヤッポ(chapeau)、コスメチック (cosmetique)、マントー(manteau)、メートル (mètre)、デカタン(decadent)、デッサン (dessin)、ヌーボー(nouveau)などがある。シヤッポは現在では帽子に代はられて古語となつたが、その他の語は今も尙ほ用ひられ、ヌーボーは藝術上の用語から更にヌーボー型となつて不得要領の人の意に用ひられる。

藝術用語には畫室のアトリエ(atelier)、藝術家の流派のアンデパンダン(Indépendents)、寄席や喜歌劇を言ふボードビル(vaudeville)がある。大正末期に近く入つたレヴュー(revue)は元來は佛語であるが、國語へは英語經由で

入つたのである。

服裝語彙では、英語を經て入つたものが多いが直接佛語から入つたと思はれるものには先に擧げたもののほかに、レーヨン(rayon)があるが、これは人造絹絲である。化粧品で言ふヘチマ・コロンのコロンは佛蘭西語のオ・ド・コロン(eau de Cologne)から來た。コロンの原意は獨乙の地名ケルンの意であるが、日本語に取り入れる時にコロンを香水の意と誤つて國語のへちまをつけたものである。

料理用語も多くは英語を通じて入つたが、小料理屋又は踊り場附の料理屋を云ふキャバレー(cabaret)、突き出しの意のオルドゥーブル(hors d' oeuvre)や酒の名のアブサン(absinthe)、シャンパン(champagne)或ひは澄んだスープのコンソメ(consommé)などは佛語から傳つたものであらう。ヒレ肉のヒレも英語で解かれるけれども、寧ろ佛語のヒレ filet から出たものと考へられる。

最近は外交用語として承認の意のアグレマン(agrément)、公報又は公告の義のコミュニケ(communiqué)が入つた。アダレマンを人名と誤解してアグレマン氏と譯した新聞記者のあつたことは、この語の借用乃至歸化の程度を物語るものであらう。社會思想用語には、サボタージュ、ブルジョア、プロレタリアがあるが、いづれも英語を通じて入つたものらしく、勞働組合主義の一つであるサンヂカリスム(Syndicalisme)は佛語から直ちに傳つたものと思はれる。

外國人の意のエトランゼ(étranger)は島崎藤村氏の作品の題目にのぼつたことがあり、流行語のモダン語としてはアデュー(adieu)、アミ(ami, amie)、シック(chic 洗練された、粋なの意)、デビュー(début 初舞臺)が行はれるに

至つた。

一種の和製佛語としては、ベレ帽やヒレ肉が行はれ、又「メートルをあげる」と言ふやうな成句がつくられるやうになつた。

獨乙語の研究は、他の西洋語に比して遲くはじめられたが、それは幕末の安政開國の直前のことであつたが、獨乙語の單語が國語中に盛んに混淆したのは獨乙醫學の勃興と哲學輸入に伴なひ、近年では社會經濟や登山・スキーの用語に侵入して來た。

明治二十年代頃までは軍隊で「止れ」の意に獨乙語のハルト(halt)が用ひられたのであるが、現在の情勢と思ひあはせば隔世の感が深い。醫學用語は近來醫學の進歩に伴なつて專門語彙を增加して行く傾向があるが、ガーゼ(Gaze)、オブラート(Oblate)は、英語からではなく獨乙語から入つたものである。病名では、トラホーム(Trachom)、チフス(Typhus)の原語には英語を普通あてられてゐるけれども、これらは英語と同一語源であり同形類音であるが、英語から侵入した語ではなく出自は獨語である。またラッセル、リゾールも獨語である。

哲學や近年は社會思想方面の獨乙語が傳つたが、アルバイト(Arbeit 研究論文)、イデオロギー(Ideologie 觀念形態、目的意識)、デマ(デマゴーグ Demagog の略、煽動家、煽動の意にも用ふ)、ルンペン(Lumpen 日本では浮浪者の意に用ふ)などがある。

登山・スキー用語としては、ゲレンデ(Gelände 練習場)、ザイル(Seil 綱)、シャンツェ(Schanze 飛躍臺)、シュプール(Spur 足跡)、シーハイル(Shi Heil スキーに榮光あれの意)、ヒュッテ(Hütte 山小屋)、ピッケル(Pickel 斧)、ル

ユックサツク(Rucksack)などがあつて、山岳用語を豐富にしてゐる。

日常語には醫學上の專門語が次第に浸潤する傾向があり、又エネルギー・シヤン・メエチン・フラウ・ゲルトなどの語が弘く行はれる。又飜譯借用語には「時代精神」があるが、獨語の外來語としての運命は英語の勢に大いに壓倒されてゐるのである。

〔四〕露西亞語・伊太利語

露西亞語研究は露國のわが國の北邊を侵したことが動因となり、第十九世紀初葉の文化年間からはじめられた。しかし外來語と云ふ點から考察すると、國語と露西亞語の交渉は既述の歐洲語とは比較にならないほどに寥々たるものである。幕末頃より露國と交渉をもつた函館・長崎には、方言化した二三の露語の殘存の痕跡を認めることができるが、外來語としては露國より舶載の文物に伴なつた名稱を除けば、近來頓に擡頭した所の社會經濟思想上に侵入した露語があるのみである。

ロシア人を指すロスキー(Ruskii)は日本語の語感が伴なつて露助と稱されたが、現在では古語となつた。湯沸器のサモワール(samovar)、苔原を言ふツンドラ(tundra)、三頭の馬で曳く橇のトロイカ(troika)や、樂器のバラライカ(balalaika)の如きは英語にも入つてゐるが、本來は露語である。これらの語のあるものは間接に英語を通じて傳つたものがあらうけれども、又直接に傳來した物產の名稱として入つたことも想像できる。

酒のウオッカ(vodka)や、ストーブにあたるペーチカ(peekilka)、服飾語のルバシュカ(rubashka)などは相當古くから認められる露語である。

近來殊にサウエット・ロシヤの建設この方は、社會主義思想に關する用語が國語に入て來たのであるが、この方面の語には左のやうなものが見られる。

インテリゲンチヤ　inteligencija　知識階級、下略してインテリと云ふ。
キノ　kino　キネマ、映畫。　タワーリシチ　towarišč　仲間。
コムソモール　komsomor　青年共産黨。　モツプル　mopr　國際赤色救援會。
コルホーズ　kolchóz　共同農場。

最近の外來語が上略或ひは下略などを行つてインテリ・プチブル・レポ・ゼネストなど短縮化される傾向は、端的な表現や語感の强さなどの能率本位から來たものであらうけれども、近來の露西亞語に於ける同傾向が國語の語法に働きかけてゐることも見逃すことが出來ない。又外來要素としては、「赤大根」とか「何年計畫」とか言ふ語が露西亞語から飜譯して借用されてゐる。「何年計畫」と言ふのはサウエットの「五ケ年計畫」から來たことは申すまでもない。

明治以後の西洋外來語として、最後に伊太利語のことを述べなければならない。以上に概觀した西洋語中でも伊太利語の硏究は最も遲く明治中期以後に東京外國語學校あたりで始められたのであらうが、少くとも明治二十年代を遡ることはなからうと考へられる。

國語に入つた本來の伊太利語は主として音樂に關する專門語であるが、これらの語は直接に傳つたのではなくして殆んどすべてが英語を經由して輸入されたものと言はれてゐる。從つて多くの國語中の伊太利語系統の外來語の出自は英語であると考へねばならない。近來では音樂專門用語が次第に日常語彙の中に取り入れられて、オペラ(opera)、

ソプラノ(soprano)、セロ(cello)、或ひはピアノ(piano)などの語はよく人の口にも上るやうになつたが、いづれも出自は英語である。されば伊太利語は外來語と云ふ點からみると直接に國語の語彙を豐富にし、且つ國語に新鮮味を加へたとは考へられないのである。なほ日常に「テンポが早い」と言ふテンポは元來は伊太利語で樂曲の速度を言ふテンポ(tempo)から出たものである。

結　語

西洋外來語は、現在に於いて、密接な國際關係と社會の複雜化とに伴なつて、或ひは學術の進歩發達に從つて、學術・技術方面より平常語彙に入り來り、最近ではスポーツ・山岳・映畫等の方面から入つて國語の語彙を益々豐富にしつつある。殊に英語は、西洋外來語中でも、英語敎育の普及により且つは時運に乘じて勢力を伸し、新外來語の九割五分を占める。而も所謂モダン語の大部分は英語から入つたものである。更に近來の南洋貿易の勃興につれて南洋方面の言語までが加つて來る狀勢である。かくして新外來語は加速度に國語中に侵入して或ひは歸化し、或ひは消滅する。實に現代は外來語の氾濫時代の感を呈してゐる。こゝに洪水の如くに絕えず押し寄せて來る外來語を如何に取り扱ふべきやの問題が生じて來るのである。かゝる情勢のもとに、近年この方面のことを取扱つた專門誌「外來語研究」(季刊)が京都で刊行されるに至り、その誌上の論考に見るべきものが多い。

外來語問題を、保守的な立場から考へると、氾濫された外來語の輸入を堰止めて外來語を歸化させないやうに國語の淨化を計らうとするのである。しかし簡潔な表現をなすために單語を短縮化して發音する近來の外來語の傾向は、

能率的に考へれば、强ち排斥すべきではない。なほ外來要素としては、國語中に西洋語から成句や諺を飜譯借用し、或ひは飜譯文體の波及によつて西洋語の文章法を借用して國語の表現法をより適切ならしめ且つ國語の文體に新なる色彩を添へてゐることは見逃さるべきではない。これらの外來要素の特質を考へる時には、外來語は國語から絕對的に排斥除外さるべきではなく、寧ろ國語の能率をあげるためには、外來語乃至外來要素の助力を得て思想傳達の具に供して、國語の表現法を益〻豐富にすべきであらうと考へられるのである。

以上に於いて、西洋外來語の過去より現在に至る實相を加速度に概觀したのであるが、與へられた時日と紙面とでは、更に外來語の音韻變化の方則と外來要素の國語の文章法への影響とを總括する餘裕は他日を期せねばならなかつた。けれども、その主要なる點については、必要に應じて各所に說明を加へておいたことは申すまでもない。

參考書目

最後に洋書及び雜誌中の論文を除いた西洋外來語に關する近來の主要なる單行書を附載しておきたい。

◇

前田太郎　外來語の研究　大正十一年

新村出　東亞語源志　昭和五年

新村出　南蠻更紗　大正十三年

新村出　琅玕記　昭和五年

音聲學協會　ことばの講座一輯　昭和六年（市河三喜博士、外來語について）（新村出博士、語源と語史）

荒川惣兵衞　外來語學序說　昭和七年

鹽田良平　日本文體に及ぼしたる西洋文體の影響（岩波講座世界文學）昭和七年

楳垣實　國語に及ぼした英語の影響（英語英文學講座）昭和八年

◇

上田萬年等　日本外來語辭典　大正四年

古賀十二郎　長崎市史風俗篇　大正十四年（下卷附錄、長崎方言集覽）

村岡典嗣　吉利支丹文學抄　大正十五年（附錄、歐語抄）

荒川惣兵衞　日本語となつた英語　昭和六年

中目覺　外來新語辭典　昭和七年

〔附記〕本稿を草するに方つては、先人の業績に負ふところが多いが、特に新村出博士の論考述作に負ふところの多いことを記して、深謝の念を獻げたい。

昭和十年三月二十五日印刷
昭和十年三月三十一日發行

國語科學講座
（第十二回配本）

東京市神田區錦町一丁目十六番地
編輯兼發行者 株式會社 明治書院
代表者 三樹退三

東京市神田區三崎町二丁目一番地
印刷者 株式會社明章印刷所
代表者 細谷祐三

發行所 東京市神田錦町一丁目 株式會社 明治書院